1

ちこちのレジ横にはあしたばんが置い

「地球って本当にまるいんだな」



(平成 26 年) **3**月**9**日

http://ashitaban.net/

五

文字が語る、

私たちの見てきた姿。

響していたのだろう。

た

だけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだがではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さだけではなく、旧小学校で偶然彦坂さんだけではない。

たりした。

「いーとの共同生活についても綴ってきシピを再現したり、三宅島大学のメンシピを再現したり、三宅島大学のメンルと出会い、彼女に教わった明日葉レ

そう、何かが起こるから行くのではなく、何かを見つけるために私達は動なく、何かを見つけるために私達は動い。しかし、暮らしに溢れる小さな発い。しかし、暮らしに溢れる小さな発い。しかし、暮らしに溢れる小さな発い。しかし、暮らしに溢れるから行くのではのだ。

あ

普段は内地で島での生活とはかけ離 普段は内地で島での生活とはかけ離 を書き続けてきたこの活動で、特に印を書き続けてきたこの活動で、特に印象的な事は商店での出会いである。あしたばんは発行直後に島内の旅館、飲したばんは発行直後に島内の旅館、飲したばんは発行直後に島内の旅館、飲したばんは発行直後に島内の旅館、飲したばんは発行直後に島内の旅館、飲したばんは発行直後に島内の旅館、飲したばんは発行直後に島内の旅館、飲食店、役場など様々な場所に配達させて頂くのだが、その中でも配達先のあるのが商店である。まちのあくを占めるのが商店である。まちのあ

からこそ、手で渡すことに喜びを感じからこそ、手で渡すことに喜びを感じなしているよ」と読者の方からの声もにしているよ」と読者の方からの声もにしているよ」と読者の方からの声もにしているよ」というであるのだ。

今回あしたばんは記念すべき第五十今回あしたばんは記念すべき第五十号を迎えた。これは、私達の拙い取材を真摯に受けて下さった方々、そ置を快く引き受けて下さった方々、そ置を快く引き受けて下さった方々、そこでは、

区切りを迎える。 録し続けたこのあしたばんは一先ず一録間を文字に、目に見える形に、記

げます。ありがとうございました。 夢に、感謝と希望を持って御礼申し上 りをより明るく、強くしていたことを りをより明るく、強くしていたことを



イルカと自然な距離感で()

商店に飾られている五枚のイルカの香店に飾られている五枚のイルカたちの色々な表情が収められてイルカたちの色々な表情が収められていた。店の主人に聞けば、撮っているがはイルカのために三宅島へわざわざ移住して来たのだという。イルカへの愛情と、その情熱が写真からまっすぐ愛情と、その情熱が写真からまっすぐと伝わってきた。三宅島で写真を撮りと伝わってきた。三宅島で写真を撮りと伝わってきた。三宅島で写真を撮りてもう十年近くなるという、高橋はけてもう十年近くなるという、高橋はけてもう十年近くなるという。



島に移り住んだのは六年前。イルカと島に移り住んだのは六年前。イルカと流げるプログラムのたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通い始めたたのがきっかけで水族館に通いがある。

いう。

を決める直前には三窓島や御蔵島に通い出し 大へ会いに三宅島や御蔵島に通い出し 大のだそうだ。時には仕事の休みを一、 たのだそうだ。時には仕事の休みを一、 気が悪い日が続くと、海に光が差し込 気が悪い日が続くと、海に光が差し込 気が悪い日が続くと、海に光が差し込 気が悪い日が続くと、海に光が差し込 気が悪い日が続くと、海に光が差し込 気が悪い日が続くと、海に光が差し込 まず、せっかく来ても良い写真が撮れ なかった。最高の瞬間に出会う為には を決める直前には三週間連続日帰りで を決める直前には三週間連続日帰りで

に住む始まりだったという。 イルカを撮るときは、相手との距離 イルカを撮るときは、相手との距離 人と同じように、意識をしっかり持っ て生きていると思っているから、その で生きていると思っているから、その で生きていると思っているから、その はに入るとき、人と信頼を築いていく 域に入るとき、人と信頼を築いていく ならばしていると言った。彼らは ように、距離を少し置いて写 真を撮る。すると、彼らから近づいて くるタイミングがあるのだそうだ。

イルカの写真を撮ることにとどまらず、イルカの写真を撮るこという高橋さん。で、より深みが増すという高橋さん。で、より深みが増すという高橋さん。かたむきな姿勢で自然と対峙しようとひたむきな姿勢で自然と対峙しようとがりを感じる写真を撮ることにとどまら感じることができた。

(龍山千里

この『あしたばん』は、加藤文俊研究室が三宅島大学リサーチの一環で制作しています!

おしたばん

た

一人目の卒業生

生が誕生する。笹井美由紀さん。二〇 校する。そして同時に、二人目の卒業 二年四月に内地から赴任してきた保 彼女が三宅島に来ることになったの 今日、三年間続いた三宅島大学が閉

すると決めていた。 から、三宅島大学のことも全力で応援 ば、と思っていたそうだ。島に移る前 を肌で感じるために、参加できるイベ 立てることが自分の仕事であると思っ だ」という説明を受け、三宅島を盛り あったためだ。「これは復興支援なの ントには全部参加して楽しまなけれ てやって来た。三宅島の面白いところ に赴任するという保健所のシステムが は、二年間のローテーションで三宅鳥

乗り気ではなかった。笹井さんの周り 業制作も作るのは無理だと考えていた ことが分かっていたため、同時期に卒 さん自身は、三月に引っ越しが重なる の人はやることを勧めてきたが、笹井 卒業制作をすることに対してはあまり そんな笹井さんだが、三宅島大学の

あ

思いが強まっていった。 しくできるのかもしれない」という の人に後押しされ、「もしかしたら楽 う加藤教授の言葉を始め、たくさん のだ。しかし、「完成させなくてもい い」「一人でやらなくてもいい」とい

なったに違いない。 女にとってかけがえのないものと なの力で作り上げた卒業制作は、彼 初仲良くなった女友達や三宅島大学 を発信できれば、という思いを形に ないような、島民一人一人の生き方 る。それは、ガイドブックには載ら 生の生活を切り取ったもの」だと語 マネージャーの上地さんなど、みん したものだった。笹井さんが赴任当 彼女は自身の卒業制作を、「島民の

が切れることはないだろう。 れでも、笹井さんと島とのつながり 終わり、今月末には内地へ戻る。そ 拠ではないか。二年間の赴任期間が を最後まで忘れずにいた何よりの証 は、三宅島を盛り立てるという思い 言葉を口にしていた笹井さん。それ 取材中、何度も「楽しく」という

(中島彩也香)

別れの身支度



和。深く息を吸い込むと爽やかな気分 冷たい空気が入る。空は青く、掃除日 ろから。暖房で暖まった部屋にスッと はスタート、まずは窓を開け放つとこ 十二時を知らせる島内放送と共に掃除 になった。 「大掃除」が御蔵島会館にて行われた。 三宅島大学の閉校式前最後の行事

どこか感慨深かった。 が入った。お風呂にこびりついた汚れ ごとに、まるで別れの身支度をしてい ビューをした方との楽しい時間が想起 るようで、雑巾を握る手にも自然と力 念ではあったが、少しずつ綺麗になる ものを片付けてしまうことはとても残 夏を、魚のオブジェからはインタ た落書きからは子どもたちと過ごした と詰まっていた。窓いっぱいに描かれ された。そういった思い出ともいえる 会館には三宅島大学の軌跡がぎゅっ 、会館の歴史を示している気がして、

る卒業式・閉校式の準備が進んでいた。 日はとうとう最後の行事、きっと素敵 できたことを素直に嬉しく思えた。今 プロジェクトに少しでも携わることが 間見えると同時に、この三宅島大学の 構築されてきた島と大学の関係性が垣 メッセージが掲げられていたが、一つ な光景が見られることだろう。 私たち 部屋の中や廊下には次々とポスターや 一つの作品もずらりと並ぶと迫力が違 端から順に見て歩くと、少しずつ 方、掃除と並行して、本日行われ

> 感謝の気持ちを持って島での時間を過 もいよいよ、けじめをつける時がやっ ごしていこう。 てきた。最後の最後まで心を込めて、



三宅の徒路

学校の、そして三宅島に住む人みんな 生だけでなく、校長先生までもが生徒 学校の先生とその子どもたちも参加 グ』。六年生の児童の弟妹やお母さん、 生の学年行事『三宅島一周ウォーキン と親しげに会話をする様子は、三宅小 列の前の方では、男の子と校長先生が し、みんなで歩いて都道を一周した。 の距離の近さを象徴しているようだっ しりとりをしているらしい。担任の先 こえてくる。 「校長先生、『る』です!_ 今年が二回目という三宅小学校六年 子どもたちや先生のおしゃべりが聞

(枡野友香

その姿を見ると、疲れているはずなの

に小走りで坂を下りはじめる子もい

テープをもってみんなを待っている。

く坂の下で、先生が横断幕とゴール もたちと励ましあって歩いているうち に、終わりに近づいてきた。校舎に続 長かった小学校への道のりも、子ど

と疲れた顔色も見えるけれど、それ以 と、自然と拍手が沸き起こる。ちょっ た雰囲気が、みんなの顔を輝かせてい んなでゴールした」という興奮に満ち 上に「やりきった」という達成感と「み 最後の一人がゴールテープを切る

生、車を出してみんなをサポートして きっと、最後まで歩ききった子どもた 成功を収めた。でも一番頑張ったのは、 の力で『三宅島一周ウォーキング』は 送ってくれる近所の方など、多くの人 下さったお母さん方、道端から声援を 子どもたちと一緒に歩ききった先

年後、もしくは何十年後、彼らが『三 げで、今日の記憶がより印象的なもの 限っては特別な思い出となったかもし を歩く。当たり前の出来事も、今日に 宅島一周ウォーキング』のことを思い になり、みんなの思い出として彼らの れない。がんばって島を一周したおか 返すその日が楽しみだ。 心に刻まれたのではないだろうか。数 おしゃべりをしながら、いつもの道

山田晴香